三浦綾子論（五）―『塩狩峠』―

A study of Ayako Miura(5)―〝Shiokari pass〟―

*小田島　本有
Motoari ODAJIMA

一

『塩狩峠』に関しては忘れられない思い出がある。

大学時代、親しい友人がおり、彼がこの作品を強く薦めてくれていた。当時の私はやや天邪鬼なところがあり、「感動できる作品だから」という言葉に却って胡散臭いものを感じ、学生時代手に取って読むことがなかったのである。

その私が初めてこの作品を読んだのは、三十代も半ばになってからの頃。当時運転免許証を持っていなかった私は、バス通勤をしていた。バスの中が貴重な読書の時間となり、その時に読んだのが『塩狩峠』であった。友人が薦めてくれてから既に十五年近くの月日が経過していた。

非常に読みやすかった。そしてついつい物語の世界に引き込まれ、私はあろうことか降りるべきバス停を忘れてしまい、乗り過ごしてしまったのである。

しかし、そのことで私がすんなり三浦文学の愛読者になったかというと、決してそうではない。確かに読みやすい作品であったし、三浦綾子がストーリーテラーとして稀有の才能を持っていることは納得できた。その一方で私は幾つかの引っ掛かりを覚えていたのである。

一つは非常に平易な言葉遣いだったこと。これは後に作者本人が『氷点』以来小学生にも読める言葉遣いを意識して書いていたことを知るに及んで納得できるようになったが、その当時はいかにも物足りない印象を否めなかった。

そして二つ目は、いかにもこの作品が鉄道職員の殉死という事実にもたれかかって書かれている印象が強く、『塩狩峠』がその題材に偶然恵まれていたという思いを拭いきれなかったことである。『塩狩峠』は幸運だった。しかし、他の作品もそううまくいくわけではない、というように。

以上のことから、当時の私は三浦綾子という作家を「この程度のもの」という断定を下してしまった。その考えが変わるにはさらに十年近くの月日を必要としたのであった。

三浦綾子は数多くの小説を書いているが、『塩狩峠』は愛読者の間では『氷点』と並んで人気の高い作品である。しかし、その一方で馴染めないと感じる読者も少なくない。それは、この作品が他の三浦作品に比べても宗教色が強いということが大きく影響していると思われる。

この作品は、一九六六年（昭和四十一年）四月から一九六八年（昭和四十三年）八月にかけて『信徒の友』に二十九回にわたって連載された。『信徒の友』は日本基督教団出版局から発行されていた雑誌であり、当時の編集長は佐古純一郎であった。『氷点』で華々しいデビューを飾った綾子に注目した佐古が、まったく面識のなかった彼女に直談判して執筆の了解を得られたというエピソードがある。綾子にしてみると、キリストの教えを伝えたいと常日頃願っていたことからすれば、『信徒の友』は格好の発表場所といえた。『塩狩峠』が他の作品に比べて宗教色が強いというのはこのような背景があったからである。ちなみにこの作品は後に新潮社から単行本が出され、文庫本も版を重ねることになった。映画化もされ、今では三浦綾子を代表する作品となっている。

*釧路高専一般教育科（国語）小田島本有

二

一九〇九年（明治四十二年）二月二十八日、塩狩峠で客車が外れて逆走し、鉄道職員であった長野政雄が自身の身体で客車を止め、乗客の命を救った。このため長野は殉死した。現在、塩狩駅の近くには長野政雄の殉職碑があり、そこを訪れる人も少なくない。長野は熱心なクリスチャンであった。

改めて断るまでもないことだが、実在の長野政雄と作品に登場する永野信夫はまったく別個の人物である。そもそも長野自身の遺言によって手紙や日記などが焼却され、資料となるものが殆んど残っていなかった。そのため作者は想像力によって永野信夫を造型しなければならなかったのである。

また、長野政雄の殉職の真相についてもさまざまな説があることは、文庫本の「あとがき」の「補遺」で作者自身が「自殺説」「ハンドブレーキ操作ミスの過失死説」「覚悟の上の犠牲説」の三つを取り上げていることから明らかである。中島啓幸『塩狩峠　愛と死の記録』（いのちのことば社フォレストブックス、二〇〇七・七）は長野政雄の足跡を可能な限り辿ろうとした力作であるが、それでも死の真相は明らかにされたわけではない。

長野政雄の存在を知るに至った経緯について、綾子は『遺された言葉』（二〇〇〇・九）に収録された「愛と謙遜」という文章の中で書いている。旭川六条教会の研修会で綾子は参加者のひとり藤原栄吉氏と出会う。藤原氏は自分の意見にことごとく綾子が反論したということで不満を持った。そのことを知った彼女が謝罪のため藤原氏の自宅に赴き、親しくなったのがきっかけである。藤原氏の机の上には書きかけの原稿が置かれてあり、それが長野政雄に関することであったという。藤原氏は生前の長野と面識があり、その姿を書き残そうとしていた。綾子が長野政雄を知ったのはこのときが初めてである。

事実と作品との相違はいろいろ散見される。

長野政雄は一八八〇年（明治十三年）愛知県の出身であり、死亡したのが二十九歳のときである。これに対し、永野信夫は一八七七年（明治十年）東京本郷の出身となっており、亡くなったのは三十二歳として設定されている。

また、作中に登場する中村春雨は実在の文学者であったが、彼は長野と同年齢であり、彼の親友でもあった。これに対し、作品の中で春雨は信夫の叔父隆士の友人であり、信夫より十歳年上として設定されていた。この年の開きは大きい。

また、春雨の書いた『無花果』についても、その内容が大きく改変されている。

その最たるものは主人公鳩宮庸之助の扱いだろう。かつての恋人との仲を裂かれ、鳩宮は米国に渡る。そこで彼は世話になった家の娘と結婚し、牧師にもなる。帰国してみると、かつての恋人であった沢が獄に入れられたことを彼は知る。沢は親に無理やり別の男性との結婚を強いられたが、妊娠を知った夫に堕胎を迫られて口論となり結局夫を殺害した。やがて沢は脱獄して鳩宮に会いに来たが、彼は彼女を匿ってしまう。これが後に発覚し、鳩宮も獄に入れられた。その間も彼の妻は決して夫への愛を失わない。やがて沢は縊死する。このことを出所してから知った鳩宮は自責の念に駆られて家出をし、放心状態で歩いているところを汽車にはねられ、死んでしまった。これが『塩狩峠』の中での説明である。

ところが、原作の『無花果』において鳩宮は死んでいない。妻のエレミヤ（『塩狩峠』ではエミヤという名前になっていた）をはじめ、一時は彼やエレミヤを拒絶していた日本人の家族たちも彼を受け入れており、作品の結末は大きく異なっている。作中ではエレミヤの無償の愛が鳩宮の心を救ってくれる展開になっているのだ。

綾子はなぜこのように改変を加えたのであろうか。

春雨から『無花果』を手渡された信夫は一気にこれを読んでいる。そしてその感想を直接春雨にも伝えている。もし、キリストの教えを伝えるのであれば、牧師となった鳩宮をこのように描く必要はなかったのではないか。これが信夫の抱いた素朴な疑問であった。事実、話の内容を聞いた妹の待子は妻を裏切るような牧師が描かれたことに対して憤慨もしている。これに対して春雨は、「神の愛を知りながら、ともすれば不信仰におちいるわれわれキリスト教徒の姿」というより「わたし自身の姿」を描いている、と述べていた（「いちじく」）。この言葉から類推するに、綾子はそこに作者の自己処罰の意味合いを強めるため、主人公を死に至らしめたと考えられよう。

三

『塩狩峠』の扉には新約聖書の一節が書かれていた。

一粒の麦、
地に落ちて死なずば、
唯一つにて在らん、
もし死なば、
多くの果を結ぶべし。　（ヨハネ伝　第一二章　二四節）

この一節はまさに永野信夫の生涯に当てはまる。彼は最初キリスト教への反発から始まり、その後信仰を得てからは布教行為に身を捧げ、ついには自らを犠牲にしてその命を閉じた。その犠牲のあり方に対しては読者の間で反応が両極端に分かれることについては先述したとおりである。ただし、教会で彼の教えを受けた人々、さらには後述するが三堀峰吉、そして婚約者の吉川ふじ子、上司だった和倉礼之助など、彼の死に心を揺さぶられ、変容を余儀なくされた人の例は枚挙にいとまがない。この作品では神への捧げものとしての〈犠牲〉が大きなテーマとなっている。

三

この作品において、主人公に大きな影響を与えた人物として父親の永野貞行を忘れるわけにはいかない。貞行は作品の前半で脳溢血のため急死してしまうのだが、その後の信夫に計り知れない影響力を持った。

貞行は日本銀行に勤務する銀行マンだった。エリートと言ってよいだろう。彼は母親のトセの眼鏡にかなった菊と結婚した。そして二人は仲睦まじく暮らしていたのだが、菊がクリスチャンであることが分かるに及んでトセの態度が一変した。トセは士族としての誇りが高く、しかもキリスト教嫌いであった。彼女は菊に信仰を捨てるか、それとも家を出て行くか、二者択一を迫ったのである。このとき菊は口先だけ「捨てる」という態度をとることを潔しとしなかった。ここに菊の性格の一端を伺うことができる。そして、彼女の信仰を応援したのが夫の貞行だった。貞行は菊の両親の了解を得たうえで、菊を別の家に住まわせ、そこに通う生活を選択した。もちろんこのことは母親には隠したままである。

この結果、幼い信夫の面倒は祖母のトセが見ることになった。士族の誇り、キリスト教への毛嫌いは当然信夫にも影響を与えることになる。そもそもキリスト教は長い間わが国で禁じられていたわけであるから、キリスト教をタブー視する風潮は当時にあって何ら珍しいことではなかった。その点からいえば、貞行は旧来の価値観に捉われない自由な思想の持ち主であったと言えるだろう。

貞行が信夫に与えた影響は少なくとも三つ挙げられる。

一つは約束の大切さを教えたことである。

学校で幽霊が出ているとの噂が立ち、子供たちが夜の八時に校庭に集まろうという約束をする場面がある。この日の夜はあいにくの雨。信夫は友達と約束したことを打ち明けるが、「ぼく、いかないよ。こんなに雨が降ってきたらだれも集まらないのに決まっているから」と言う。これに対して貞行はこう語るのだった。

「信夫、行っておいで」
貞行がおだやかにいった。
「はい。……でも、こんなに雨が降っているんだもの」
「そうか。雨が降ったら行かなくてもいいという約束だったのか」
貞行の声がきびしかった。
「いいえ。雨が降った時はどうするか決めていなかったの」
信夫はおずおずと貞行をみた。
「約束を破るのは、犬猫に劣るものだよ。犬や猫は約束などしないから、破りようもない。人間よりかしこいようなものだ」
（だけど、大した約束でもないのに）
信夫は不満そうに口をとがらせた。
「信夫。守らなくてもいい約束なら、はじめからしないことだな」
（「桜の下」）

結局、このようにして信夫は雨の中、学校に「行かせられた」のだが、そこにいたのは吉川修ただ一人だった。「ああ、吉川か。ひどい雨なのによくきたな」との信夫の言葉に、吉川は「だって約束だからな」と答えている。

約束通り夜八時に学校に集まったのは信夫と吉川の二人だった。しかし、この二人の行動の内実は大きく異なっている。信夫は貞行に促され、しぶしぶ訪れたのに対し、吉川の行動は自発的なものである。しかも吉川は来なかった友達を責めるようなことをしていない。これは信夫が吉川を見直すきっかけとなった出来

事と言ってよいだろう。貞行は二つのことを教えている。一つはいい加減な約束は最初からしないこと、もう一つはいったんした約束は必ず守るべきこと。それは人間の尊厳にも関わることである。

作品ではこのほかにも約束をめぐるエピソードが盛り込まれている。

例えば、幼い頃、吉川と信夫の間で将来坊さんになろうとの約束を交わしたこと。その後吉川が北海道へ移り住み、十年後に再会したとき、このことに未だにこだわり続ける信夫を見て吉川は驚きの表情を隠さない。また、後年信夫が吉川の妹ふじ子にプロポーズしたのもある意味において一つの約束である。このとき、ふじ子はカリエスと結核を併発して寝たきりの状態だった。治らなければ一生他の女性とは結婚しないという宣言は、確かにふじ子を勇気づけ彼女の回復のきっかけを与えた。この辺は『道ありき』の中で、三浦光世が堀田綾子にプロポーズしたときのことが反映されている。

約束とは人と人との間で交わされるものである。当然のことながら、そこにはさまざな人間模様が浮き彫りとなる。約束をきちんと果たす人間もいれば、約束を守らない人間もいる。その場合も最初から守る気がなかった人間もいれば、必死に守ろうとしたが結局のところ守れなかった人間もいる。またその場合、約束を守らなかった相手に怒りを露わにする人間もいれば、寛大な態度で応じようとする人間もいる。すなわち、我々はさまざまな約束に取り巻かれて生活しているのだが、これをめぐって人間のさまざまなありようが見えてくる。約束を守ろうとする信夫はいわば父親の貞行によって導かれたものだ。

貞行が信夫に与えた影響の二つ目は、人間に上下の差がないことを教えたことである。幼少期の信夫を育てた祖母のトセは士族としての誇りを持った、いわば封建的思想が染みついた女性だった。男は人前で泣くものではない。やられたらやり返すのが男。これらのことをトセは事あるごとに信夫に伝えていたのである。

家に出入りする小間物屋の六さんがいた。彼は新潟の出身であり、同郷であるということでトセも彼を迎え入れていたのである。六さんには虎雄という、信夫より二歳年下の男の子がいた。信夫と虎雄がたまたま家の屋根に上り、そこで口論となって虎雄が信夫を突き落としてしまう場面がある。このとき信夫は虎雄から突き落とされた事実を彼に口止めさえした。

「ちがう。ぼくがひとりで落ちたんだ」

信夫がいらいらと叫んだ。貞行は微笑して、二、三度うなずいた。信夫に年下の友だちをかばう度量のあることが嬉しかった。

「そうか。お前がひとりで落ちたのか」

「そうです。ぼく町人の子なんかに屋根から落とされたりするものですか」

信夫の言葉に貞行の顔色がさっと変わった。六さんはうろうろとして貞行をみた。

「信夫っ！　もう一度今の言葉を言ってみなさい」

凛とした貞行の声に信夫は一瞬ためらったが、そのきりりときかん気に結ばれた唇がはっきりと開いた。

「ぼく、町人の子なんかに……」

みなまで言わせずに貞行の手が、信夫のほおを力いっぱいに打った。信夫には何で父の怒りを買ったのかわからない。

（「鏡」）

「町人の子なんかに」という言葉を耳にした途端、貞行の表情が急変している。信夫は日頃祖母から言われている言葉をそのまま口にしただけである。したがって、父になぜ殴られたのかこの時点では分かっていない。このあと、貞行は人間はみな同じであることを信夫に伝え、「虎雄くんたちにあやまりなさい」と促す。しかし、これに信夫が応じないと分かると、貞行はピタリと両手をついて六さんと虎雄に頭を下げている。「その父の姿は信夫の胸に深くきざまれて、一生忘れることができなかった」との一文は、このときの場面が信夫にもたらしたものの大きさを象徴的に語っていると言えよう。

これ以降、信夫をトセにばかり任せっきりではいけないと痛感した貞行は信夫と意識的に関わるようになるのだが、貞行は封建的な思想に捉われない自由主義的な発想を持っていたこと、さらにキリスト教に対して寛容な立場をとっていたことからも明らかなように、トセを相対化しうる立場にあった。ここには妻となった菊の存在が大きく影響している。キリスト教そのものが神の前での平等を唱える宗教であった。

ただし、その貞行にも限界はあった。トセを相対化しうる立場にありながらも、彼のとった行動はなるべく母親を刺激しないように身を処すということ、その結果が菊を別の家に住まわせてそこに彼が通うという方法であり、母親にこのことを隠している以上根本的な解決にはなっていなかったのである。事実、この秘密

が露顕してトセの怒りに触れたとき、貞行はただ謝るしかなすすべがなかった。貞行が信夫に与えた影響の三つめは遺書である。

貞行はトセと同様、脳溢血によって急死した。その後彼が遺書を残していたことが明らかになるが、その遺書は通常のそれとは明らかに性格を異にしていた。

人間はいつ死ぬものか自分の死期を予知することはできない。ここにあらためて言い残すほどのことはわたしにはない。わたしの意志はすべて菊が承知している。日常の生活において、菊に言ったこと、信夫、待子に言ったこと、そして父が為したこと、これすべて遺言と思ってもらいたい。

わたしは、そのようなつもりで、日々を生きて来たつもりである。とは言え、わたしの死に会って心乱れている時には、この書も何かの力になることと思う。

（「門の前」）

そこには財産分与に関する記述は全くなかった。ここに示されているのは後に残る家族たちに対するメッセージである。

人間は死すべき宿命を抱えており、その限られた時間の中で自らのあり方を問い続けるのが〈現存在〉である、とハイデッガーは『存在と時間』の中で述べていた。貞行は常に死を覚悟した生き方をしており、それがその遺書の中に端的に表れている。殉職した信夫も絶えず遺書を携帯していたということは、このとき父親が書いた遺書が大きな影響を与えていたことを物語っている。

四

この作品の中で信夫と吉川の友人関係は特筆すべきものとしてある。

この二人は幽霊事件以来仲良くなったが、その後父親が借金を抱えたため吉川家は夜逃げ同様に北海道へと渡った。吉川から信夫に手紙があったのは彼の父親が亡くなってからのことである。

手紙を書くとき、その相手の顔は見えない。特にこの二人の場合、彼等は互いを理想化する傾向があった。その一つが性的な事柄に関することである。

叔父の隆士が大阪からやってきて、信夫を吉原へ連れて行こうとする場面がある。信夫も男の一人である以上、当然性的な興味はあった。彼はこのとき、行きたいという思いと、恐いという思いに揺れていた。しかし、いざというとき、彼は急に踵を返し、その場を逃げ出してしまったのである。

逃げ出す直前、彼の心に浮かんだのは（吉川なら、女と遊びはしないにちがいない）という思いだった。彼はこのとき吉川を「良心の基準」に見立てていた。文通が行われているとはいえ、二人は小学校四年以来ずっと顔を合わせていない。実際の吉川に会っていないにもかかわらず、信夫は吉川を理想的人間に仕立て上げている。後日、信夫はこのときの一件を正直に手紙の中で告白するのだが、その中で自分が吉原に行かずにすんだのは「君のおかげだ」とまで述べて、彼に感謝の言葉も添えている。この辺に信夫の性格を端的に見ることができよう。しかし、一方の吉川もこのときの信夫からの手紙に驚きながらも、信夫もまた性欲に悩んでいたことを知り安心したことを正直に告白している。どちらも似た者同士だった。この二人は互いの手紙のやりとりの中で相手を理想化し、そこに自分を近づけようとするタイプの人間だった。その点では稀有な友人関係だったと言えよう。

金杉聡子は『塩狩峠』を「男がつくる物語」と断定している。そこには男性優位の原理が働いており、女性たちは男性たちを支える役回りをしているにすぎない。キリスト教は人類愛を標榜しているにもかかわらず、この作品において男女の扱われ方は平等ではない、と金杉は批判している（「もう一つの物語―『塩狩峠』論―」、『近代文学　第二次研究と資料４』、早稲田大学大学院教育学研究科千葉・金井・石原研究室、二〇一〇・三）。この作品を考える際、傾聴すべきところが多い論点である。

五

次に信夫が信仰を得るまでの経緯について見ていきたい。

信夫がクリスチャンを間近に見たのは、トセが死んでその後母の菊と妹の待子が家に入ったときであった。彼は母親が死んだと聞かされて育った。ところがその母が生きていたと急に知らされることになる。彼には大人に嘘をつかれていたという思いが拭い難く残った。

信夫は実の母親に対してアンビバレントな（正反対な）感情があった。息子として母親を慕う思いは当然ある。しかし、長らく離れて暮らしていたこともあり、

待子のように母親に素直になつくことができない。しかも母親はクリスチャンであった。トセの影響もあり、信夫はキリスト教を恐れてさえいた。

トセは生前毎日仏壇に供え物をしていた。ところが菊はそれをしない。これを見た信夫はそれが家を追い出したトセに対しての復讐であると思い込む。トセも息子に対する遠慮があったのだろう。多くを語らない。そのことが余計信夫に不信感を植え付ける結果になった。小学生のころ、信夫は吉川に自分の母親は死んだ祖母に対してやさしくないと語っている。これ自体無理もない。このように長らく離れて暮らしていた母親になかなか馴染めないものを感じる息子の姿は、後年書かれる『続泥流地帯』の耕作の姿にも見出すことができるだろう。

信夫にとって当初キリスト教は異物として受け取られた。しかし、彼の周囲はキリスト教的雰囲気に覆われたのである。貞行の葬式は個人の遺志によりキリスト教で行われた。菊も待子もクリスチャンであり、待子が後に結婚する岸本もクリスチャンであった。その点からすれば彼がキリスト教に近づいていくというプロセスは自然な流れだったとも言える。

その後、信夫は吉川の勧めもあって北海道へ渡り、そこで鉄道職員となる。そこにはカリエスと結核を併発して寝たきりになっている吉川の妹ふじ子がいた。ふじ子に惹かれる思いは小学生の頃から信夫にはあったのだが、彼がふじ子に見出したのは彼女の内面的な美しさであった。彼女には人の行為を素直に喜ぶ性質があり、そのことに信夫自身も癒されているのである。

北海道へ渡って鉄道会社に勤め始めた信夫は上司である和倉礼之助の信頼を得ることになる。そして娘の美沙をもらってはもらえないかとまで話を持ちかけられる。そのことが逆にふじ子への思いを募らせることになった。この結果、信夫はふじ子を欲しいと吉川に願い出ることになるのだ。吉川は妹のことを思ってくれる気持ちには感謝しながらも、これを拒否する。

吉川の拒否には二つの理由があった。一つはふじ子が病床の身であり、しかも回復する見込みも立っていないこと。ここには友人への思いやりも込められていた。そしてもう一つはふじ子が信夫の嫌っていたキリスト教の信者であったことである。

ふじ子がクリスチャンになったきっかけは発症したことだった。吉川兄妹の母親は裁縫教室を開いていて当時は多くの教え子たちが通っていた。ところがふじ子の発症を知るや誰もがそこから立ち去って行った。当時結核が死病と言われ恐れられていたことを思えば、教え子たちのこのような態度は驚くに当たらない。その中にあってただ一人ふじ子を見舞い続けた女性がいた。その女性がクリスチャンだったのである。彼女は嫁入りするまでふじ子のもとに通い続けた。このような姿に接することで、ふじ子はキリスト教に関心を寄せるようになったのである。信仰を得たことで彼女は大きく変わった。それは兄の吉川も認めるところであり、吉川もそれから聖書を読むようになっていたのである。

そして、信夫を決定的にキリスト教へと近づけたのは路上伝道をしていた伊木一馬との出会いであった。伊木の言葉に感銘を受けた信夫はキリストに従って一生を暮らしたいと彼に語る。だが、伊木は信夫の言葉をすんなり受け入れず、「君はなぜイエスが十字架にかかったかを知っていますか」と尋ねたのである。このとき信夫は「先ほど先生は、この世のすべての罪を背負って十字架にかかられたと申されました」と答えた。だが、伊木は重ねてこう尋ねたのである。

「そうです。そのとおりです。しかし永野君、キリストが君のために十字架にかかったということを、いや、十字架につけたのはあなた自身だということを、わかっていますか」

（「雪の街角」）

信夫は「とんでもない」と即座に否定するのだが、伊木は信夫のような考え方をするのが普通だろうが、自分は違うと思うと言い切っている。キリストが生きていた時代と今とはかなりの時間的隔たりがある。だから直接的には関わりがない、と割り切ってしまうことはキリスト教の本質に触れたことにはならない。何も犯罪的な行為をすることばかりが罪ではない。伊木が提示した命題は、自分を本当の意味で罪深い人間と認識することができるかどうかの試金石であった。

そして伊木が提案したのが、聖書の中のどれでもいいからひとつ徹底的に実践することであった。信夫の心を捉えた聖書の言葉は「己のごとく汝の隣を愛すべし」である。そのとき彼の脳裏に浮かんだのが三堀峰吉だった。

六

作品の前半で重要な役割を果たすのが永野貞行だったのに対し、後半で重要な役割を果たすのはこの三堀峰吉である。彼は鉄道会社に勤務する信夫の同僚であ

った。彼はあるとき机の上に置いてあった同僚の給料袋を盗むという不祥事を起こし、上司和倉の怒りを買った。信夫はこの三堀のために動こうとする。信夫は北海道に来る前は裁判所の事務員として働いており、そこでの評判も良かった。そのようなこともあり、北海道で鉄道会社に勤めたときも立場的に優遇され、そのことにやっかみを覚える同僚も少なくなかった。その中にあって三堀だけは彼にいろいろと世話をやいてくれ、信夫もそのことに恩義を感じていたのである。

信夫は「もう許してもらえない」とあきらめる三堀を説得して彼の母親も伴って和倉の自宅を訪れ、ついには玄関の三和土に額をすりつけて頭を下げた。この姿はかつて六さんと虎雄に頭を下げた父貞行の姿と重なり合うものがある。

和倉はまもなくして旭川への転勤が決まったが、その際に三堀も連れていくことを決め、さらに優秀な部下である信夫にも旭川へ来てほしいと伝える。

「おれもいろんな男をみたが、貴様のような男は初めてみた。だれも恐ろしいと思ったことはないが、君だけは心の底から恐ろしい奴だと思ったよ」

（「辞令」）

和倉はこれ以外のところでも「君のような大馬鹿」（「藻岩山」）、「驚いた奴」（「辞令」）というように信夫を評している。いずれも信夫を高く評価する褒め言葉であるが、そこには通常の尺度では計り知れぬものがあることを示唆してもいる。「恐ろしい奴」というのは、ある意味において予言的意味合いを持った。和倉が信夫の中に恐ろしさを感じたのは、自分の目指すものにひたすら邁進する一途さを彼の中に感じ取ったからに他ならない。和倉の前で信夫は「今度三堀君に何かあやまちがあったなら、ぼくも共に辞めさせられてもかまいません」（「雪の街角」）とまで言っていた。他人のためには我が身を犠牲にするのも厭わない。この時点で和倉が信夫の最期を知り得ようはずはないが、和倉の言葉そのものが結末を暗示してもいたのである。

本来、人と人との関係は関わりが深くなればなるほど一方通行ではありえない。それは相互関係的にならざるを得ないのである。

三堀は信夫に対してアンビバレントな思いを抱いていた。

彼は同僚の給料袋を盗み、すぐに申し出をしなかったことで和倉の怒りを買い、仕事を辞めざるを得ない状況にまで追い込まれた。その彼を救ってくれたのが信夫である。信夫は自分のために和倉に対して頭を下げてまでくれた。そのことに対する感謝の思いは当然あった。

自分と一緒に信夫も旭川に来ると聞いて最初は喜んでもいた。しかし、それはしだいに猜疑心に変わっていく。信夫は自分の監視役として旭川に来たのではないか、そう彼は思うようになっていたのである。しかも事あるごとに和倉は信夫を褒める。そのことは相対的に自分の評価が下がることを意味していた。やがて三堀は和倉の娘である美沙と結婚することになるが、信夫がかつて美沙との縁談を断った事実を知って三堀は納得が行かなかった。信夫は長い間寝たきりの女性を待つがゆえに美沙を断ったという。これは三堀にとって納得のいかないことだった。やがて信夫の婚約が成立し、その媒酌人を和倉夫妻が引き受けることになったことを知り、美沙の機嫌が悪くなるに及んで三堀の信夫に対する不満は高まっていたのである。

信夫は信夫で三堀に対してやりきれない思いを抱いていた。彼は聖書の言葉に従い、三堀のために尽くしていたつもりであった。最初は感謝もされていたはずである。しかし、旭川へ来てから逆に三堀から悪態もつかれている。自分も旭川へ来たくて来たわけではない。札幌にはふじ子がいる。和倉に頼まれ、心を引き裂かれるようにしてやって来たのだ。それをなぜ三堀は分かってくれないのか。そのような思いがあったのである。

信夫は洗礼を受けるため信仰告白を書く。そこで彼が書いたのが三堀のことだった。こちらが幾ら彼のために頑張っても悪態をつかれ、心を開いてもらえない。正直彼を憎んだこともあった。しかし、彼は自分が三堀を上から見下していたことに気づかされる。三堀は酔って信夫の家を訪れたとき、「バカにしてやがる」（「隣人」）と悪態をついていたのだ。

このように三堀は信夫が自分自身を見つめ直すきっかけを与えてくれた人物であった。知らず知らずのうちに自分の中に存在していた驕りに信夫は気づかされたわけだが、これこそが自らの信仰を確かにするためにはしっかりと見据えなければならないものだったのである。

七

『塩狩峠』の主人公は永野信夫であるが、これを三堀峰吉の側から眺めた場合、

作品は異なった相貌を見せてくる。

三堀にとって、ある時期から永野信夫は鬱陶しい人物となっていた。それは彼が自分の過去の悪行を知った人物であること、その清廉潔白な姿があまりにも自分とは対照的で何かと比較されることが多かったこと、とりわけ和倉や妻の美沙が事あるごとに信夫を称賛することで、三堀を相対的に低めてしまうことになったことに現れている。和倉や美沙には明白にそのような意識はなかったかもしれない。しかし、彼らのそのような態度は三堀を結果的にいじけさせることになったのである。

しかし、三堀は自分自身を見つめ直すということはしなかった。信夫が称賛されればされるほど、却って「こんな人間はいるはずがない」という思いが先行し、信夫を疑心暗鬼の眼で眺めるようになる。そして信夫に悪態をついたりしていたのであるから、彼自身そのような自分を持て余してもいたのである。

ただここで注目したいのは、そのような信夫を三堀が無視することも可能だったということである。しかし、彼はそうしなかった。いや、できなかったと言う方が正しい。それが証拠に、彼は信夫が聖書研究会などで講演をする際には必ずついて行っている。

三堀は日露戦争に出征していた。帰国後の彼が「妙に陰気な人間」になったのを見て、信夫は「激戦の中で、三堀が多くの死を見、そんなふうに変わったのか」（「かんざし」）と思い、「聖書研究会を欠かさないのも、深く求めるところがあるのだ」（同）と思っていたのである。だが、作品は続けてこう書かれている。

だが三堀はそうではなかった。第一に、出征中に母が死んだことが何か美沙のせいのように腹立たしかった。自分がいたなら、決して母を死なせないですんだと三堀は思う。次に不満なのは、美沙が自分の留守中に実家に帰っていたことだった。自分は和倉のむこ養子になったわけではないという反撥が常にむらむらと胸の中で燃えていた。（略）

そのうちに三堀は、ふと、美沙が信夫に心をよせているのではないかと、勘ぐるようになった。三堀が聖書研究会に出るのも、キリストの話を聞きたいからではなかった。信夫の語ることぐらい、自分も語れるようになりたいという気がひとつ、信夫の信仰はどれほど真実なものか突きつめたい気持ちのふたつであった。

（「かんざし」）

この引用文の冒頭は「だが三堀はそうではなかった」と書かれている。ただここで注意したいのは、この後の説明は語り手が三堀の内面に即して語っているものであり、必ずしも客観的なものではないということである。「だが」という逆接の接続詞が使われているからといって、三堀が帰還後に陰気になった背景に戦争体験があること、聖書研究会に出席するのも戦場で数多くの死を目の当たりにしたことが理由としてあることを否定することにはならない。

三堀は信夫に向かって「おれはまだ永野さんていう人、信用しきれないんだ。どこか、いかさま臭いんだ」（「峠」）と言っている。講演で聴衆の心を捉える姿には憧れもある。しかし、その一方では信夫が偽善者ではないのかという思いも否定できない。健康な若い男が女も買わない。三堀からすればそのような男は信じ難いのであった。

「信じきれない」と相手に向かって言う姿に三堀の立ち位置が明らかだ。三堀は「信じたい」という気持ちと「信じきれない」という気持ちの間で揺れ動いていたのである。「信用しきれない」という三堀の言葉は裏を返せば「信じたい」ということでもあった。これは信仰のあり方を考える上で重要な要素となってくる。

塩狩峠での列車事故の際には三堀も同乗していた。そして一部始終を彼は目の当たりにしたのである。

三堀は、信夫の死を目の当たり見たのだった。客車が暴走し、誰もが色を失い、三堀もまた夢中で椅子の背にしがみついた。しがみつきながら、ひょいと見た三堀の目に、静かに祈る信夫の姿があった。それはほんの二、三秒に過ぎなかったかも知れない。しかしその姿は、実に鮮やかに三堀の脳裡に焼きつけられた。つづいて凛然と、いささかの乱れもなく乗客を慰撫した声。必死にハンドブレーキを廻していた姿。つとふり返って、三堀にうなずいたかと思うと、アッという間もなく線路めがけて飛びおりて行った姿。そのひとつひとつを、客車のドアロにいた三堀は、ハッキリと目撃したのだった。

人々は、汽車が完全にとまったことが信じられなかった。恐怖から覚めやらぬ面持ちのまま、誰もが呆然としていた。

「とまったぞ、助かったぞ」

誰かが叫んだ時、不意に泣き出す女がいた。つづいて誰かが信夫のことを告げた時、乗客たちは一瞬沈黙し、やがてざわめいた。ざわめきはたちまち大きくなった。バラバラと、男たちは高いデッキから深い雪の上に飛びおりた。真っ白な雪の上に、鮮血が飛び散り、信夫の体は血にまみれていた。客たちは信夫の姿にとりすがって泣いた。笑っているような死に顔だった。

三堀は、死の直前まで信夫を嘲笑し、信夫に反発していた自分が責められてならなかった。この信夫の死が、三堀を全く一変させた。（「峠」）

作品は三堀が一変した事実を語っている。彼はこれを契機にキリスト教に入信した。「ぼくの見た永野さんの犠牲の死は、遺言状よりも何よりも、ぼくにとって大きな遺言ですよ」（「峠」）と後日彼は語っている。その彼は事故の前日、信夫がふじ子と結婚することを話題にし、「あんた、その娘さんのつまりは犠牲になるってことかい」（同）と尋ねていた。同じ三堀が口にしている〈犠牲〉だが、事故の前後でその意味合いが全く異なっていることが分かるだろう。『塩狩峠』は見方を変えれば、永野信夫の〈犠牲〉によって彷徨える子羊たる三堀峰吉が信仰を獲得していく物語でもあった。

和倉もかつては信夫を娘の婿にできなかったことを残念がっていた男であった。「君と三堀じゃ少し差があり過ぎるよ」（「隣人」）という言葉が示すように、美沙が三堀と結婚することになったことに対し、忸怩たる思いを味わっていた。しかし、今や信夫の精神は三堀に受け継がれた。森下辰衛が述べるように、和倉は今新たな「信夫」を手にすることができたのである（三浦綾子読書会での発言）。そしてかつては聖書を読む必要がないと言って憚らなかった和倉が信夫の死後、聖書を手にするようになっている。信夫の死は三堀ばかりか、和倉をも変えたのである。

七

事故の後、菊からふじ子に宛てられた手紙にはこのような一節がある。

ふじ子さん、信夫の死は母親として悲しゅうございます。けれどもまた、こんなにうれしいことはございません。この世の人は、やがて、誰も彼も死んで参ります。しかしその多くの死の中で、信夫の死ほど祝福された死は、少ないのではないでしょうか。ふじ子さん、このように信夫を導いてくださった神さまに、心から感謝いたしましょうね……（「峠」）

ここで菊は一人の母親として息子の死を悲しんでいる。しかし、右に示した言葉が出てくるのは単なる強がりばかりとは言えない。かつて菊は信夫との会話の中で、「信夫さん、おかあさまはね、死がすべての終わりとは思っておりませんよ」（「連絡船」）と述べていた。これを聞いて当時の信夫は釈然としないものを感じていたのである。いずれにせよ、菊は肉体が仮に死んだとしてもなおも生き続けるものが存在していることを信じていた。その思いは昔も今も変わりない。

一方のふじ子はどうか。

作品の結末では吉川とふじ子が事故現場を訪れている。事故のあったレールを歩いて行くふじ子の姿を見つめながら、吉川の胸には（かわいそうな奴）（何とむごい運命だろう）という思いが胸をよぎる。その一方で、ふじ子が「自分よりずっとほんとうのしあわせをつかんだ人間」（「峠」）のようにも思われている。次の瞬間、ふじ子がガバと線路に打ち伏し、突き刺すような彼女の泣き声が聞こえるところで作品は幕を閉じる。この場面をいかに捉えるべきだろうか。

確かに信夫の行為は多くの乗客の命を救った。しかし、このことによって、ふじ子を初め身近な者たちを悲しませたという事実も厳然としてある。改めて〈犠牲〉とは何かという問いが大きく立ちはだかってくる。

実はかつてこれと同じ問いにぶつかった文学作品があった。それが宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』である。川に落ちたザネリを助けようとしてカムパネルラは川に飛び込んだ。ザネリは助かったがカムパネルラは見つからない。もう既に四十五分が経過している。それまでジョバンニは夢の中でカムパネルラと同じ列車に乗っていた。その中でカムパネルラは不思議な言葉を口にしていた。

「おっかさんは、ぼくをゆるして下さるだらうか」

（「七」、北十字とプリオシン海岸）

人を助ける行為は美しいことである。だが、カムパネルラの行為も自分の母親を悲しませることを避けられない。カムパネルラもそのことを自分に問いかけて

いたのである。『銀河鉄道の夜』では、タイタニック号の沈没によって溺死した幼い姉弟とその家庭教師（彼等も他の乗客の命を優先させていた）、あるいはその姉が語った蠍の話、いずれも自らを犠牲にしている。賢治はこの作品の中で〈犠牲〉とは何かについて真正面から問いかけていた。

その点で、この作品は普遍的価値を有していると言えよう。その一方で、果たして我が身を挺して客車を止める以外に方法はなかったのか、という議論も存在する。例えば乗客の荷物を投げ込むという方法もあり得たのではないか、という意見もあるがそれは今回の論考とはまた別の話にならざるを得ない。